
サンセファールの聖なる乙女

如月 みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンセファールの聖なる乙女

【Nコード】

N2152W

【作者名】

如月 みつき

【あらすじ】

『——見つけた。我が聖なる乙女よ』

唐突な囁きと共に、意識はふつりと闇にのみこまれた。

ふと気付けば、見覚えなんて全くない石造りの床。

ロゼクラート王国の地方都市、ブルグドルフェリにあるサンセフ

ァール神殿とやらにたたずむ私。

「ちよ、ちよっと待って！ 聖なる乙女って誰？ え……私っ!？」

桜川 凜々子。三十歳。独身。

聖なる乙女として、ロゼクラート王国に召喚されてしまったよう

です。

プロローグ

むせかえるような濃い花の香りが室内に満ちていた。 > b r <
石造りの冷たい床には、仄かに光る円形の紋様——魔方阵——が浮かび上がっている。そして中央には上半身裸の青年が立っていた。
> b r < 露わにした肌にも魔方阵と同様の文様が朱色で描かれている。伏せていた瞼を持ち上げると、海のように深い青の瞳が現れた。 > b r < 「どうしてもなさねばならぬのですか」 > b r < 薄く開かれた唇から苦々しい声音が漏れる。だがしかし、その声には口にした台詞を裏切るような諦めが滲んでいた。 > b r < 「まだ言うか。そなたが一番それを知っておろう？」 > b r < しつとりとした艶のある低音が呆れたように青年に向けられた。部屋の隅、魔方阵の外にたたずむのは、青年とよく似た面差しの男だった。純白の長衣をまとい、金糸の刺繍が施された腰帯を締めた男は、そのたたずまいや装飾品から高貴な身分であろうことが推測される。 > b r < 男の言葉を受けて、青年はわずかに眉をしかめてから再び瞼を閉じた。やがて青年の唇から、歌うような泣くような言葉にならない言葉が溢れだす。すると円形の魔方阵が徐々に光を強め、辺りを照らしていく。 > b r < > b r < やがてまばゆいくらいの光が部屋中を満たし、青年のかたわらに別の人影が姿を現したのである。

イケメン変質者

今日はわたし——桜川 凜々子——の誕生日。>br< 祝ってくれる恋人も無く、友人達は婚活、デートに妊婦さん。>br< まあ、この年になったら、それも仕方ないかと思うけど、なんだかモヤモヤする。>br< ——この年。ええ、そうです。わたしこの度三十歳になりました！ お同様街道まっしぐら……って、あはは……。>br< いっちょ、ぱーっとやりますかってことで、松坂牛のサーロイン（二百グラム）をお買い上げ。ざわつく心を食欲で誤魔化しつつ、誰が待つでもない家へと急いだ。>br< 五年前に引越したわたしの家は、駅から徒歩十分で、築十年の五階建てマンションの三階だ。気ままなひとり暮らしも早十年。ここまです。>br< あと二分ほどでマンションに着くというところできいきなり、本当にいきなり、足元が真昼みたいに明るくなって、あまりの眩しさに右腕を上げて両目を覆った。>br<>br< 『——見つけた。我が聖なる乙女よ』>br<>br< 唐突に耳元で聞こえた囁きが、わたしに異変を自覚させてくれた。どこからか濃厚な花の香りが漂ってくる。その香りにあてられてか、こめかみがズキズキと痛む。>br< めくらましのようなフラッシュに、意味不明な男の声。そしてきつ過ぎる香り。>br< 変質者が何かかと思い、両目を覆っていた右腕を下ろしたわたしの目に映るのはアスファルトの黒じゃなく、何故か灰色がかった地面（石造りの床）だった。>br<>br<「……へ？ ナニコレ」>br<>br< 我ながら間の抜けた台詞だなど思いつつも、想定外の状態に思考が追いつかない。>br< 仕事の帰りで、マンションはすぐそこで、左手には奮発した誕生祝いの松坂牛……って、あれ？違和感に恐る恐る視線を動かす。ない。なーいっ！ 左手にぶら下げていたはずの松坂牛がつ！>br<>br<「ちょ、どうしてく

れんのよ……わたしの可愛い松坂牛！」>br<>br< なんか違うんじゃないの、ともうひとりの自分が突っ込みをいれてくるけれど、この状況下で唯一理解できること——松坂牛の紛失——へと現実逃避をはかってしまふ。>br< 勢いよく顔を上げた拍子に見てはいけないうちを見てしまった。>br< 朱色の刺青（？）でびっしり覆われた上半身をさらした若い男が、すぐそばにいたのだ。>br< 出たな変質者、と内心で罵声を浴びせつつ、全力で逃げだそうとするけれど、足がぴくりとも動かない。どうしようと焦っているうちに、変質者が距離を詰めてくる。そつとおとがいを持ち上げられ、否応なく目を合わせる羽目になる。>br< シャープな顎のラインに、薄い唇。すっきり通った鼻筋に、長いまつ毛。>br< 要するに芸能人もびっくりのイケメンなのだ、変質者のくせに。>br< 何よりもその有り得ない色彩に、目を奪われる。>br< 長い銀の髪は、さらさらと音を立てそうなほど艶やかで、とても染めているようには見えない。深い海の色をした瞳は、最高級のサファイアすら霞んでしまいそうなほど美しい。>br< 常識を超越した美貌に、相手が変質者であることも忘れて見とれてしまふ。>br<>br<「……っ！？」>br<>br< その美しい顔がゆっくり近付いてきて……唇に柔らかいものが押しつけられた。

出会い頭の……

唇の上を生温かいモノがはいずり回っている。あまりの不快感に吐き気すらしてきた。>br<>br<「んー。んーんっ！」>br<>br< 男から離れようと身をよじるけれど、がつちりと押さえ込まれていてびくともしない。>br< なにコイツ、サイテー。イケメンだからって何してもいいとか思ってたんじゃないわよっ！>br< この変質者、絶対訴えてやる！ わたしのファーストキス返せー！>br< 歯を食い縛って、せいぜい心の中で罵詈雑言を浴びせるくらいしかできないのが情けない。ようやく唇が離れたかと思ったら、『——甘い』という、うっとりとした男の呟きが耳に入る。>br< 意味がわからない、と眉をしかめ、唇に残る生々しい感触を消そうと、手の甲でグイグイ拭う。>br< こんなのがファーストキスだなんてあんまりだ。ノーカウント。そう、ノーカウントでいいだろう。あれだ、交通事故に遭ったようなものだと思うしかない。>br<>br<「勝手にキスしてんじゃないわよ。わたしのファーストキス、どうしてくれんのよ！」>br<>br<と、怒鳴ってやりたいところだけど、この年でキスもまだだったのかと侮られるのも癪なので、それは言わないでおくことにする。>br< いつまでもガシガシと唇を拭うわたしを見て、男の秀麗な顔に憂いが滲む。>br< くそう、そんな顔したってダメなんだから。絶対、絶対許さないんだから！>br< ぐつと奥歯を噛み締め、わたしは男を睨みつけた。>br<>br<「聖なる乙女”よ、我らは貴女をお待ちしておりました”>br<>br< すつ、と男が膝を付き、わたしの手の甲に唇を押し当てる。>br< 瞬時に肌が粟立った。つかまれた手を振り払うと、鳥肌の立つ腕を撫でさする。>br<>br<「意味わかんない。なにが“聖なる乙女”よ、頭おかしいんじゃない。もうちょっとでマンションだったのよ！ いきなり現れて何なのよ。誕生日だから奮発

して買った折角の松坂牛だつてどつかいっちゃうし。と・に・か・
く、わたしはマンションへ帰ります！ あんたに付き合う暇も義理
もないんだからねっ」>br<>br< 半ばパニックに陥ったわ
たしは、声を出すことでこの不可解で理不尽な現象から逃れようと
していたのだと思う。男に背中を向けて、ここがどこなのかもわか
らないまま、ただこの場所から離れようとする。>br<>br<
「いやっ、離してっ！」>br<>br< もちろん、はいそう
ですかと、男が見逃してくれるはずはなく、わたしは後ろから抱き
締められてしまう。>br<>br<「アレン」>br<>br<
凜とした声に、わたしを抱き締める男の体がびくりと跳ねた。同
時に、わたしを拘束する力が緩む。チャンスとばかりに纏わり付い
ている腕を振り切り、ひとまず壁際へと避難する。>br< てっ
きり変質者の男と二人きりだと思っていたから、第三者が存在した
ことに安心していいのか、さらに警戒するべきなのか、しつかり状
況を見極めなければと、細く息を吸い、呼吸と心を落ち着かせよう
と努めるのだった。

第三者

「ラルフ＝サルフェートと申します」>br<>br< 穏やかな微笑みを浮かべて、第三の人物が名乗りを上げる。四十代半ばくらいだろうか。変質者と同じ銀の髪をしていて、色調は少し違っけれど青い目をしている。>br< 上下白の衣装を纏い、金糸の刺繍が施された腰帯を締めている。床を掃く純白のマントを留める飾りも、キラキラと輝く金色だ。ピカピカしているそれらが本物の金だとしたら、きつともものすごく高価だ。とすれば、この人は身分のある人なのだろうか。>br<>br<>br<「……あの」>br<>br<>br< 黙っていても何も解決しない。わたしは意を決してラルフさんに話しかけた。>br<>br<>br<「何でしょう。『聖なる乙女』」>br<>br<>br< またしても「聖なる乙女」ときた。やっぱりそれはわたしを指す呼称のようだけど、きつと人違いに決まっている。だいたい乙女なんて年齢じゃないし、「聖なる」と称される清らかな体でもない。>br<>br<>br<>br<「その呼び方、やめてください。人違いに決まっていますから。わたしの名前は桜川 凜々子。こちら流に言うと、リリコ＝サクラガワです」>br<>br<>br<>br<「リリコ様、ですか。貴女に相応しい愛らしいお名前ですね」>br<>br<>br<>br< 人違い云々はさらりと流し、まるで口説き文句のようなことを言ってくる。>br<>br<>br<>br<>br<「ドウモアリガトウゴザイマス」>br<>br<>br< いやいやそこ流さないでくださいよ、と心の中で突っ込みつつ、わたしは棒読み台詞で一応御礼の言葉を述べてみた。>br<>br<>br<>br<「これはアレ＝サルフェート。わたしの息子で『神の器』と呼ばれる者です」>br<>br<>br< ラルフさんは変質者を指してにこやかに笑っている。何となく似ているなあ、とは思ったけれど、まさか本当に息子だったなんて驚きだ。親子して一体何を企んでいるのだろう。>br<>br<>br<>br<>br<「……はあ」>br<>br<>br< 曖昧に頷きつつ、何で笑ってられるかなあこの人、

と思う。だってさあ、自分の息子がだよ、初対面の相手に無理矢理キスしてんだよ。普通止めるよね。うん、絶対止める。知らなかったならまだしも、“聖なる乙女”って呼ぶくらいだから、一部始終見ていたはず。ほんと、信じられない。わたしのラルフさんに向ける視線が、どうしても冷たいものになってしまうのは仕方ないと思う。>br<>br<「色々お聞きになりたいこともあってしょーうし、場所を移しましょう。アレ、そなたは着替えを済ませてきなさい」>br<>br< さあ、こちらへ、と促され、ヒールの踵を鳴らしながら、ラルフさんの後へ続いた。

召喚

ラルフさんが淹れてくれたお茶を口に含むと、仄かに林檎のような甘酸っぱい香りがした。>br< あー、何だかほつとする。少しだけ気分が落ち着いたわたしは、ぐるりと室内を見回した。あの部屋からほんの少しだけしか離れていないけれど、雰囲気が違うだけでこうもリラックスできるものかと思う。床は焦げ茶色の板張りで、シンプルな応接セットが置いてあるだけだ。ソファアのクッションは硬くもなく、かといって柔らか過ぎもせず、適度に体重を受け止めてくれる。色も深みのある緑で、目に優しい癒し系だ。ランプのような照明器具が壁やテーブルの脇に立てかけてあって、穏やかな光が灯されている。>br<>br<「少しは落ち着かれましたか？」>br<>br<「ええ、まあ」>br<>br< 馴染み深いお茶を口にしたことで、気持ちがいくらか解れたわたしはこくと頷く。>br<>br<「ここはどこですか？ 聖なる乙女って何なんですか？ わたし、家に帰りたいんですけど」>br<>br< 手にしていた花柄のカップをソーサーに戻し、まずは置かれた状況を把握しようと質問する。ぎゅっと両手を握り締め、真っ直ぐにラルフさんの青い目を見つめる。彼の言葉に嘘があれば、すぐにわかるように。>br<>br<「リリコ様が今おられるのは、ロゼクライト王国の地方都市、ブルグドルフェリにあるサンセファール神殿です」>br<>br< カタカナばかりの国名や地名に、聞き覚えのあるものはない。しかもサンセファール神殿など、聞いたこともない。予感を感じていたものの、落胆は大きかった。>br<>br<「どうしてわたしがここに？」>br<>br< 薄々わかつてはいるけれど、はつきり相手の口から聞かなければ諦めきれない。だからわたしは敢えてその質問を口にした。>br<>br<「“聖なる乙女”として、我々がリリコ様を召喚したからです」>br<>br<——あー、はいはい。召喚ですか。>b

r< はた迷惑なことだと思つづく。こちらの都合を聞きもせず、異世界召喚なんて言語道断だ。これって誘拐とかより性質が悪いと思いませんか？ だつて自力で帰る手段はほぼ皆無なわけですからね！>br<>br<「あの、失礼ですけど人違いじゃありませんか？ わたしは何の取り得もない、普通の人間ですよ」>br<>br< につこりと嫌味なくらいあからさまな作り笑顔を浮かべてやつた。>br< 特殊能力なんてないし、愛と正義と希望なんて人並み以下しかありません。まして勇気なんてひとかけらもち合わせませんから！>br<>br<「それは有り得ません。サンセファール神が自らの乙女を見誤るなど、ありませんから」>br<>br< ラルフさんの断言に参ったなあと思つた。>br< だつて全然納得いかない。十六、七くらいの超絶美少女（もちろん清らか）だったら、聖なる乙女ですよつて言われても、何となく納得できると思う。でも年齢三十、容姿も至つて平凡のわたしに言われても、何だかなあとモヤモヤするだけだ。>br<>br<「聖なる乙女に選ばれる条件とかつてないんですか？」>br<>br<「r< ということ、わたしは切り口を変えてみた。>br< もし条件とやらがあれば、そこから外れているということをアピールして、お役御免つてことにしてもらおうと思つたのだ。なのに……」>br<>br<「条件？ そのようなものありません。全てはサンセファール神の思し召しにございます」>br<>br< 若干驚いた顔をしつつ、ラルフさんはまたも言い切つた。>br<——全ては神の思し召し。>br< ナニ、ソレ。人選間違つてんじゃないわよ！>br< わたしは存在すら疑わしい神とやらを思いつ切り罵つてやつた。もちろん、心の中で、だけど。

おとぎ話

まずは聖なる乙女がどのような存在なのか、知っていたただかねばなりませんね。>br< そう言つて、ラルフさんは語り出した。

>br< 現実味のない、おとぎ話のような話を。>br<>br<

< >br<>br< 神々が人の肉を捨てて、展開へと旅立たれた後のことです。>br< 神々がそこに残っていた神気は、時の流れと共に失われ、次第に魔物達がその行動範囲を広げていったのです。>br< 小さな村や町は魔物の襲撃に遭い、人間達は少しずつその数を減らしていきました。ついには大きな町や都市にも魔物は姿を現し始め、略奪と殺戮を喜々として行うようになりました。>br< そんな折、世界の片隅でひとりの乙女が祈りを捧げていました。乙女には魔物を滅ぼす聖なる力や、飢えに苦しむ人々に与える食糧を調達する資金もありません。彼女にできるのはただひたすらに祈ることのみでした。>br< いるはずのない神に祈るなど、なんて馬鹿な娘だと、周囲の人々は乙女に冷ややかでした。もう神の存在を信じる心など、とうの昔に失われていたのです。>br< しかし他者のために捧げるその真摯な祈りは、いつしかひとりの神の元へと届くのです。その神の名はサンセファール。かつて月神と呼ばれていたものです。>br< 清らかな魂が放つ光に、眠りから覚醒しつつあったサンセファール神は、人界の様子に心を痛めました。光あふれる穏やかで満ち足りた世界だったはずなのに、今は闇に覆われ、一筋の希望さえも見出せないような有様だったからです。>br< 何とかしたい、そう思うサンセファール神でしたが、肉の器を脱ぎ捨てた状態で、魔物を一掃するような強大な神の力を揮えば、人界を救うどころか、破壊してしまいかねません。ですから、神を宿すことのできる肉の器——つまりは人間を探さねばならなかったのです。>br< サンセファール神は、乙女の夢に姿を現し、そのようなことを告げました。乙

女はその言葉を信じ、たつたひとりで旅にでました。苦難の果て、ようやく神の器たりえる人物を探し出し、サンセファール神をその肉体に降臨させることに成功したのです。>br< 神の発する気は凄まじく、瞬く間に魔物は駆逐され、人界に安寧をもたらしました。そうして乙女は“聖なる乙女”と呼ばれるようになり、サンセファール神の声を聴く者として、崇拜されるようになったのです。>br< それ以降“神の器”たるべき人間に降臨するサンセファール神は、その時代に生きる女性の中から“聖なる乙女”を選び、こうして神の声——すなわち力は、絶えることなく人界に届けられるようになったのでした。>br<>br<>br< 長い話を聞かされても、わたしには何の感慨もなかった。神様なんてものの存在がまず信じられないのだから仕方ない。ラルフさんは実話だというけれど、きつと都合のいいように色々と脚色されているに決まっている。>br<>br<>br< 初代の“聖なる乙女”と“神の器”が、ロゼクライト王国とサンセファール神殿の祖となられたのです。>br<>br<>br< 胡散臭いなと思っていたのが伝わってしまったのか、ラルフさんが苦笑しながら付け加えるように言った。>br<>br<>br< つまり“聖なる乙女”というのは、サンセファール神の声を届ける役目を担うということですか？>br<>br<>br< 伝説の昔語りを聞いても、いまいち乙女的重要さがわからない。>br<>br<>br< ええ、まあ、そのようなものです。>br<>br<>br< だったら“神の器”さんだけで十分なんじゃないですか？ ある程度体の自由があれば、神の力を引き出すことも可能でしょう。>br<>br<>br< 歯切れの悪い返答に嫌な予感を覚えつつ、わたしはさらに突っ込んで聞いてみた。>br<>br<>br< “神の器”とはあくまで器。サンセファール神がこの地をお守りくださるのは、“聖なる乙女”の存在があればこそ、なのです。>br<>br<>br< ——ナンダ、ソレ。>br<>br< わたしは思いつ切り眉間に皺を寄せた。

生贄

「え、ちょ、待ってくださいよ。じゃあ、もし“聖なる乙女”がないと、どうなるんですか？」>br<>br<「神は降臨なさらず、器に蓄えられた神気は徐々に薄れ、やがて失われるでしょう>br<>br<「……すると、魔物とやらが暴れる？」>br<>br<「そうなります」>br<>br<「そこまで会話して、わたしはふと気が付いた。“聖なる乙女”なんて呼ばれているけれど、つまりは神様へ捧げられる生贄（？）のようなものなんじゃないかと。そうになると、器に宿った神様は手に入れた乙女に何を望むのだろう。」>br<>br<「……恐ろしくて聞けない。」>br<>br<「ここはひとつ何も気付いてない振りをして、何とかして“聖なる乙女”から逃れないと。」>br<>br<「えーと。そんなこの世界を守るようなスケールの大きな役目なんて、異世界人のわたしには到底無理ですよ。もつと探してみたらどうですか？　きつと適任の方を見逃してるだけですつて」>br<>br<「酷いと言われようが、異世界人のわたしに、この世界のために犠牲になるいわれなんてない。いきなり召喚されただけでも迷惑なのに、これ以上厄介な事に巻き込まれるなんて真つ平御免だ。」>br<>br<「“聖なる乙女”はリリコ様、貴女なのです。器に降臨された神自らが貴女を見出したのですから、人違いなどということは有り得ません」>br<>br<「いつまでも悪あがきをするわたしに、ラルフさんは悲しそうな目をしながらも断言してくれた。でも、はいそうですか、わかりましたなんて、とてもじゃないけど思えない。どうしてわたしが、という憤りが強過ぎて、手のひらに爪が食い込むほど拳を握る。」>br<>br<「過去に異世界から“聖なる乙女”として召喚された方が二名いらっしやいます」>br<>br<「その言葉に、わたしは知らずうつむいていた顔をゆっくり上げる。」>br<「自分と同じ境遇に陥った人が二人もいたんだ。」>b

r< ごくりと喉を鳴らし、神妙な面持ちでラルフさんを見た。握り締めた拳に嫌な汗がにじむ。>br<>br<「その人達は元の世界へ帰れたんですか？」>br<>br< ひよつとしたら、という思いで放った問いかけは、無残にも打ち消された。>br<>br<「いいえ。お二方ともこの国で一生を終えられました」>br<>br<「——帰れない。いや、帰さなかったのか。」>br<>br< この国は、サンセファール神は、死ぬまでわたしを離してくれない。目の前が真っ白になり、ただ茫然とラルフさんの顔を見つめるのだった。

ひとりぼっち

「少し休憩されてはいかがですか」>br<>br< 気遣うような声に、わたしは読んでいた本から目を上げた。>br< ふと、いい香りに振り返れば、焼き菓子とお茶が用意されている。もう午後のお茶の時刻になったのかと、目頭を押さえて、凝り固まってしまっている目の筋肉を揉みほぐす。>br<>br<「ありがとう。エドナさん」>br<>br<と、休憩を促してくれたエドナさんにお礼を言ってから、大きく伸びをした。パキパキと鳴る関節に、眉をしかめる。>br< ヤダ、もう。これじゃあ年寄りだ。>br< ひっそりと溜息をこぼし、冷めないうちに頂こうと席に着く。>br<>br<「エドナさんも一緒にお茶しようよ。わたしのお願い、聞いてくれるよね？」>br<>br< 心細そうな顔をすれば、エドナさんは困った様子を隠しもせず、しぶしぶだけど同席してくれる。>br< エドナさん、というのは、このサンセファール神殿に仕える女性神官で、魔法の使い手だ。>br< この世界にはファンタジーには付き物の、魔法が存在する。幾つかの系統があるらしいけど、彼女は光の魔法に優れているのだとか。>br< 二十五歳。独身。わたしと同じ黒髪だけど、長さは腰の辺りまでである。>br< お手入れ大変そう。>br< 肩より少し長いだけのわたしでも、毛先がすぐに痛んだりするのだから、そりゃもう大変だろうな、と思うのだ。>br< ラルフさんと同じようなゆったりした白の神官服を身に着けているけれど、腰帯の締められたウエストは細くて、フルフルと揺れる胸元はかなり豊かだ。って、つい親父目線になっちゃってるよ。 とうとうわたしの服装も、彼女と同じものにしてもらっている。最初、やたら肩やら背中やらの露出が激しいドレスのようなものを持ってこられたのだけれど、それは丁重にお断りした。だいたいそんなのが似合うような、ボン、キユツ、ボン、の体型じゃないし。>br< そんな彼女が、何故だ

かわたしの世話役に選ばれたらしい。本人はそのことに不満はなく、“聖なる乙女”であるわたしの（甚だ不本意だけど）世話ができるとあって、嬉しいようなのだ。>br< 最初の頃はお茶に誘っても平身低頭、固辞するばかりで取りつく島もなかったけれど、近頃、どう言えば彼女の首を縦に振らせることができるのかがわかってきた。>br< それがこの「わたしのお願ひ、聞いてくれるよね？」攻撃だったりする。>br< どうも上の方から（きつとラルフさんだと思う）、“聖なる乙女”の願ひはできるだけ叶えるようにと言われているみたいだ。それをわかっていて、わざと「お願い」なんて言っちゃわたしは、かなり性格が歪んできたかも。でもそれもこれも、異世界で生き抜いていくためには仕方ない。味方なんて誰もいない。この世界でわたしは、真正銘のひとりぼっちなんだ。>br<>br<「まだお読みになられているのですか？」>br<>br< ちよつとだけ暗い気分になったわたしに、エドナさんがおずおずと話しかけてきた。机の上に積み上げた本を振り返り、につこりと笑う。>br<>br<「うん。だって何にもわからないんだよ」>br<>br< 情報は少しでも多い方がいいに決まっている。わたしが熱心に読んでいるのはこの国——ロゼクライト王国——の建国史や、歴代の“聖なる乙女”に纏わる記録などだ。>br< 召喚された直後はプチパニックに陥っていたから気付かなかったけど、言葉が通じるっていうのはありがたかった。何気なく手に取ってみた本を開いてみたら、文字自体はミミズが這ったようにしか見えないのに、目で追うと脳内で変換され、その内容が日本語として頭に入ってくるのだ。>br< このことだけに限定すれば、神様に感謝してもいい。サンキュー、サンセファール神。わたしを“聖なる乙女”に選んだことは、絶対に許してやらないけどね！>br< この国の人達が聞いたなら、間違いなく卒倒するだろうことを考えつつ、正面に座るエドナさんにちらりと目を向けた。

決められた未来

「エドナさんのおかげだよ。神殿の図書館へ連れてってくれたから、こうして暇つぶしができるんだよー」>br<>br<「いいえ、わたくしなど何も。少しでもリリコ様のお役に立てればと、思っではいるのですが……」>br<>br< はにかみながら臉を伏せるエドナさんは、とっても可愛らしい。男性神官からの人気も高いんだろーな、と少しばかり不謹慎なことを考えてみたりする。>br< いや、でもほんと。図書館に行ったことは収穫だった。歴代の“聖なる乙女”の記録が、事細かに記された本が保管されていたんだもん。貸出オツケーってことだったから、即借りて、貪るように目を通した。>br< その結果、彼女たちに共通点というものがないということがわかった。年齢・出身地・髪の色・目の色・体型。どれに注目してみても、てんでバラバラだった。最年少は五歳で、最年長は六十歳と、年齢もびっくりするほど幅広い。条件なんて本当にないのだと、思い知らされる結果となったのだ。>br< でも“聖なる乙女”として選ばれた彼女らの未来には、ひとつだけ共通点があった。彼女らは皆、正妃として王宮へ迎え入れられていたのだ。見目麗しいうら若い乙女なら、王様や王子様が恋に落ちたとしても不思議はない。でも五歳とか六十歳って、どうよ？ たまたま当時の王様や王子様が、ロリコンに熟女好きだったとか？ そんな偶然あるわけない。>br< “聖なる乙女”＝正妃。この図式は決定事項と考えるしかない。ということは、ばやばやしていたら、わたしも正妃にされちゃうのかな。あはは……冗談キツイ。それが名ばかりの正妃だったらまだしも（過去には五歳やら六十歳もいたわけだし）、もし、名実共に正妃としての務めを強要されたら……。そこまで考えると、ぶるりと寒気がした。>br< 若くもない。美人でもない。だから大丈夫と信じたい。でもわたしには大きな特徴がある！ だってわたしは異世界人。物珍しさが勝って、

興味本位で……とか有り得る。有り得るよねっ！ 嫌だ。絶対ヤダ——ッ！！>br<>br<「そんなの絶対いやっ！」>br<>br< うっかり口にしてしまって、エドナさんをオロオロさせてしまった。>br< ごめん、エドナさん。貴女に罪はないんだよ。うん、とってもよくしてもらってる。>br< そう、悪いのは神様。わたしを呼び寄せたサンセファール神なんだから！>br< そしてふと思う。“神の器”として選ばれた変質者——いや、アレンさんだっけ。彼は自分が選ばれたことをどう思っているのだろうか、と。

闖入者

ロゼクラート王国に召喚されてから、十日ほどが過ぎた。>br<
< 聖なる乙女関連の本は読み尽し、あとはエドナさんに頼みこんで、この世界のことを少しずつ教えてもらおう日々が続いている。エドナさんには礼儀作法や衣装についてなど、日常的な常識についてラルフさんにはロゼクラート王国やその他の国について教えてもらっている。>br< そうそう、ラルフさんってば、このサンセフアール神殿の神官長だったんだよね。つまりはこのトップ。権力者ですよ、権力者。>br< あれからアレンさんには会っていない。わたしの行動範囲は限られているから、向こうから会いに来ない限り、会うことはないのだ。別に会いたいわけじゃないけど、避けられているというのは癪にさわる。>br<>br<「ねえ、エドナさん。アレンさんだっけ？ ラルフさんの息子さん。あの人ってば、今何してるのかな？」>br<>br<

他意はないけれど、気になるから尋ねてみた。エドナさんだったら、ラルフさんから何か聞いてるんじゃないかと思ったのだ。>br<>br<「ご安心ください。リリコ様には近付かないようにと、ラルフ様からきつく言われていらつしやるようです。わたくしもアレン様が強引に近付くようであれば、排除するようにと命じられております」>br<>br<「排除！？」>br<>br< 随分物騒だなあ、と思い、わたしは目を丸くする。それにしてもラルフさんはどうしてそんな事を言ったんだろう。“神の器”であるアレンさんとわたしを引き離すことに、何のメリットもないはずだ。むしろ近付けないといけないはずなのに……。>br< まあ、これで、急に抱き締められるなんてことにはなりそうにないかと、ほっと胸を撫で下ろす。もう二度とあんな目に遭うのはごめんだった。自分の意思とは関係なく、力でねじ伏せられる。そんな扱いを受けるのは嫌だった。>br<>br<「エドナさんって、ひよっとし

てすつごく強かったりするの？」>br<>br< どう考えたつて男と女では体格に差があり過ぎる。まともにやり合って、エドナさんがアレンさんを排除できるだなんて思えない。するとエドナさんはポツと頬を染めて「アレン様を退けるくらいなら、お任せください」とかいだした。>br<>br<「……ウソ。なんで、どうして、どうやって!？」>br<>br< ポカン、としたのは束の間で、徐々にわき上がる熱に浮かされるように、わたしはエドナさんに詰め寄った。いつもと違う様子に、腰が引けてる彼女の腕をつかみ、さあ、吐け、とばかりに、目に力を込める。>br<>br<「光の攻撃魔法で、なのですけれど……。あ、でも一般の方にそのようなことは致しません。そんなことをすれば、冗談では済まないような状態になってしまいますので」>br<>br< 焦って言い募るエドナさんの話を要約するところだ。>br< “神器”であるアレンさんは、やはりというか当然というか、どんな系統の魔法に対しても耐性があるのだそう。そのために、一般人なら到底受けきれない攻撃魔法が直撃しても、その効果は半減されて、かすり傷くらいで済むらしい。……理論上は。>br< いいなあ、便利だなあ。わたしも魔法使えないかなあ。そしたら易々と力で屈服させられるなんてにならないのになあ。>br<>br<「わたしも魔法を使えるようにならないかな？」>br<>br<「あの、わたくしでは心許ないのでしょうか？ でもわたくし、リリコ様のためならこの命、少しも惜しくはありません」>br<>br<「だめもとで聞いてみたんだけど、半泣きになってしまったエドナさんに慌てて手を振る。」>br<>br<「え、そういう意味じゃないよー。向こうの世界じゃ魔法なんてなかったからさ、もしわたしにも使えるんだったら、使ってみたいなあって思っただけ。あのね、エドナさんのことは頼りにしてるし、信じてるよ？ だからそんな顔しないでよー。でも命は大事にしてね。命懸けられたつて、わたしは全然うれしくないんだから」>br<>br< ちょっとした好奇心だったのに、大事に発展してるのはどうしてなのよ

！>br< エドナさんの、命懸けます、発言にビビリつつ、わたしはやっぱりと妙な覚悟をたしなめた。“聖なる乙女”が大事だからって、目の前で人の死ぬところなんて見たくもない。平和ボケした日本人であるわたしには、とてもじゃないけど耐えられないと思う。そんなことになったら、精神的におかしくなってしまうかも知れない。>br<>br<「えっ、あっ、そうなのですか？ 申し訳ありません。わたくし、えっと、あの……ラルフ様に相談してみます！」>br<>br< 涙で潤んだ目をクルクル動かし、エドナさんは真っ赤になってペコリと頭を下げた。>br< そんな仕事も可愛いなあ、と思う。世俗から隔離された神殿という特殊な場所で生きてきたから、きつとこんなに純粹なんだろうと思う。変な虫が付かないように、このわたしが目を光らせておかないと。なんて、おやし臭い思考回路に陥ってしまうわたし。かなりヤバイよね、この状態。>br< たはは、と乾いた笑いを漏らしていると、いきなり部屋の扉が開け放たれ、ずかずかと人が入ってきた。>br<>br<「誰！？」>br<>br< 基本的にラルフさんがエドナさんしか訪れることのない部屋に、突然現れたのは、きらきらしい金の髪をした青年だ。整った精悍な容貌に、がっしりとした体躯。若葉のような瑞々しい翠の目が細められる。>br< わたしの発した問いを綺麗に無視して、青年は腕を伸ばしてくる。>br<>br<「……！？」>br<>br< ぐいっと引っ張られ、倒れそうになったわたしは、何すんのよ、と言いかけて……言えなかった。>br< あろうことか、突然現れた正体不明の青年の唇が、わたしのそれに重ねられてしまったからだ。

未来の夫

パシッ、という乾いた音が室内に響く。>br< またしても出会い頭にキスされてしまったわたしは、唇が離れた瞬間、反射的に青年の頬を思い切り叩いた。一瞬、虚を突かれたような顔をした青年だったが、すぐに顔を上げ、不敵に笑う。>br< コイツ、ちつとも反省してない。>br< カッ、と頭に血がのぼったわたしは、弾丸のように言葉を放つ。>br<>br<「この国の男っていうのは、初対面の相手にいきなりキスするっていうのが礼儀なわけ!？」ほんつとに冗談じゃない。ふざけるのもいい加減にしてっ!」>br<>br< キッ、と睨み付けてやる。>br<>br<「お下がりください。リリコ様の許可なくそのお体に触れること、どのような御身分の方でも許されません」>br<>br< わたしと青年の間に体をねじ込んだエドナさんが、声を張り上げる。心なしかその声が震えているように聞こえたのは、気のせいじゃないはずだ。>br<>br<「神官風情が……。このわたしに指図するとはな。……貴様、死にたいようだな」>br<>br<「リリコ様のお側に仕えるからには、死は覚悟のうえ」>br<>br<「ちよ、まつ、待つて!!! なに勝手に盛り上がったんのよっ!」

なにこの時代劇みたいな展開は!>br< 何だかわからないけど、エドナさんが圧倒的不利ということだけはわかる。てか、この青年は誰なんだ?>br<>br<「エドナさんに何かしたら、絶対許さないんだからね!」>br<>br< ヤダ、ヤダと思いながらも、わたしのために震えながら立ち向かってくれている彼女の力になりたくて、眼差しにありつたけの覚悟を乗せて、青年をひたと見据える。>br<>br<「礼儀知らずはどちらだ。未来の夫に刃向かうとは……教育のし甲斐があるというものだな」>br<>br< はいいいっ!? この人今なに言いました? さらっと大事なことを仰いましたよ。>br<>br<「未来の……夫」>br<

> b r < ポカンとするわたしを面白そうな目で眺め、青年は素早くエドナさんの両手を捕らえると、ひとまとめにして背中の方へ捻り上げる。> b r < テーブルに上半身を押しつけられ、長い髪が乱れて細い体に纏わりつく。> b r < > b r < 「……くっ」> b r < > b r < その横顔は蒼白だ。それでもエドナさんは悲鳴ひとつ上げない。見ているこちらが泣きたくなってくる。> b r < > b r < > b r < 「女の子に乱暴するなんて、最低よっ！」> b r < > b r < 何もできず指をくわえて見ているだけの自分にひどく腹が立つ。悔しくて、悲しくて、噛み締めた唇が切れたのか、血の味がする。> b r < > b r < 「陛下！」> b r < > b r < 「お兄様！」> b r < > b r < そんな時、開けっ放しだった扉から、男女の声が聞こえた。> b r < ハツとして視線を向けると、少し慌てたようなラルフさんと、こんな荒っぽい場面に不似合いなヒラヒラ、フリフリのドレスを着た可憐な美少女がいたのだった。

王妹殿下

ラルフさんの登場で一氣に氣が緩んだわたしは、ヘナヘナとその場に座り込む。>br<>br<「何ということなさるのですか。その者の手をお放しください、陛下」>br<>br< 落ち着いた声音の中に、咎めるような響きを感じられた。でもラルフさんつてば、この暴力男のことを“陛下”って呼んだような……。>br<>br<「この者はわたしに刃を向けたのだぞ。それがどのような意味を持つのか、知らぬとも言つのか」>br<>br< この滅茶苦茶上から目線の台詞と、さっきのラルフさんの“陛下”という呼称から導かれるのは、この暴力男がロゼクライト王国の国王陛下だという解でしかない。ということは、わたしがひつぱたいたのは国王の頬で……。>br< — ひいーっ！ どどど、どうしよう。怒りのあまり、我を忘れてやつちやつたよお。不敬罪とかで牢屋に入れられちゃう？ いやいや、まさか処刑されちゃうなんてことは……ない、よね？>br< 内心ビビりまくるわたしは、きつと顔面蒼白だったに違いない。血の氣の失せたわたしの顔と、未だ拘束されたままのエドナさんに視線を走らせたラルフさんは、ものすごく男前な台詞を口にした。>br<>br<「この者は神官長たるわたしの命に従っただけ。全ての責は、このわたしにあります」>br<>br< きゃあー、素敵！ 素敵過ぎますラルフさんっ！>br< わたしは両手を胸の前でしっかりと握り締めた。この場面で、しかも国王陛下に対して、こんなにはつきり言えるなんて立派だよ。横柄で乱暴なコクオウサマとは、器が違うよ。天と地ほどね！>br< だってさ、神官長と国王陛下じゃ、陛下の方が権力者だよな。それなのに自分の保身に走るんじゃない、部下であるエドナさんを守ろうとするなんて、すごいことだと思う。一般社会には、こんな人殆どいない。上司つてものは、平気で部下を切り捨て、保身を図るものなんだからさ。>br<>br<「お兄様、

あんまりですわ。わたくし、失望致しました」>br<>br<
ラルフさんと一緒に来ていた可憐な美少女が、憤慨した様子でその
蕾のような唇を開いた。そしてエドナさんを拘束する陛下の手をつ
かむと、ピシリ、と叩く。>br<>br<「兄が酷いことをして
ごめんなさいね」>br<>br<「……殿下」>br<>br<

拘束を解かれたエドナさんの手首を、美少女——殿下？ は申し
訳なさそうな顔をしてさすっている。>br<>br<「リーシュ
！」>br<>br< それを咎めるように、陛下が彼女の名を呼
ぶ。それを完全無視したリーシュ様は、わたしの方へと身を寄せて
きた。>br<>br<「リリコ様、お怪我はありませんか？」>
br<>br< 大きな目は真夏の植物を思わせる生命力に満ちた
翠色で、いきいきとした輝きを放っている。ゆるくウェーブのかか
った栗色の髪は腰の辺りまでの長さがあり、華奢な体にフワフワと
纏わり付いている。ファンタジーな世界だから、森の妖精です、と
かわわれても信じてしまいそうなくらい、可憐な少女だと思う。間
近でのぞき込まれると、同性だっていうのに、何だかドキドキして
しまう。>br<>br<「聖なる乙女」を害するわけがないだ
ろう」>br<>br< お偉いコクオウサマが何か言っているけ
れど、どうでもいいでしょ。目の前にいるリーシュ様に釘付けのわ
たしは、無視を決め込んだ。>br<>br<「あ、はい、大丈夫
です。ラルフさんの顔を見たら、何だか安心してしまつて……腰が
抜けてしまったみたいです」>br<>br< 透き通るような白
い肌はきめ細かくて、羨まし過ぎる。こっちはお肌の曲がり角なん
て、とつくの昔に通り越してるんだからなあ。やっぱ、若いってい
いねえ。はああ、と感嘆の溜息なんてついて、わたしはがっくり
とうなだれた。>br<>br<「ラルフ。この方とリリコ様をお
願います。わたくしはお兄様を連れて、アレン様のもとへ参りま
す。そちらで事の次第を説明していただきますわ」>br<>br<
< よろしいかしら、と小首を傾げるリーシュ様に、ラルフさんは
恭しくお辞儀をした。>br<>br<「申し訳ございませんが、

よろしくお願い致します、殿下」>br<>br< よくつてよ、
とふんわり微笑んだリーシュ様は、わたしに向かつて「また改めて
ご挨拶に参りますわ」と言い残し、苦い顔をした陛下を連れて出て
行った。

至上の甘露

国王兄妹が出て行つたあと、ノロノロと立ち上がるうとしていたわたしに、ラルフさんが手を差し出してくれる。>br<>br<「ありがとうございます」>br<>br<「つかんだ手は大きく温かで、少しだけほつとする。衣服に付いた汚れを落とそうと、お尻から足元にかけて軽くはたき、エドナさんへと歩み寄る。>br<>br<「どこか痛めてない？」>br<>br<「悲鳴こそ上げていなかったけど、あんなに手ひどい扱いを受けたのだ。どこか痛めていたとしても、全然不思議じゃない。>br<>br<「わたくしは大丈夫です。それより、リリコ様こそ大丈夫ですか？」>br<>br<「あちこち動かしながら眉をしかめているエドナさんに、逆に氣遣われてしまった。>br<>br<「何言つてんの？ わたしは別に何もされてないから平気よ。……それより、ありがとう。わたしを守ろうとしてくれて」>br<>br<「できるだけ明るく言つて、にっこり笑つて見せる。わたしは平気だと、あんなこと大したことじゃないんだと、自分にもエドナさん達にも言い聞かせる。>br<>br<「ねえ、ラルフさん。あの人……陛下だっけ？ いつもあんな横暴な感じなんですか？」>br<>br<「あれじゃ、まるきりの暴君だ。あれが通常の状態だったなら周りの人間はたまらないよな」と思う。わたしだつて二度と関わり合いになんてなりたくないっていうのに、自分は未来の夫だと言っていた。慣例というか何というか、過去を振り返れば“聖なる乙女”が、その時の国王の正妃として迎えられているけど、あんな人じゃ絶対に嫌だ。選択権が与えられるんだつたら、断固拒否してやるだけだな。>br<——ないよねえ、選択権。>br<はふ、と小さく溜息を落とし、陛下の容貌を思い返す。アレンさんとはまた違ったタイプのイケメンだったと思う。どれだけイケメンだろうと、最高権力者だろうと、あれじゃダメだ。無理だ。人の意

思を蔑にするようなヤツは、同じ人間とは認めてやらない。動物と同じ……いや動物以下だ。動物だって嫌がる相手に、無理強いするなんてことはないんだし、動物と同じだなんて言ったら、動物さん失礼だよ。うん。>br<>br<「いえ。今回の陛下の言動は“乙女の蜜”にあてられたせいではないかと思われます」>br<>br<「乙女の蜜」?」>br<>br<怪しげな名詞に眉をひそめる。何だか果てしなく嫌な予感がして、ブルリと身震いがした。>br<>br<「聖なる乙女”は至上の甘露。その体液——汗、涙、唾液などは、得も言われぬ芳香を放ち、口にすると蕩けるように甘いと」>br<>br<えらく真面目な顔をして、ラルフさんはとんでもないことを言い出した。どつと、嫌な汗が背中を滑り落ちる。ってか、この汗も“得も言われぬ芳香”とやらを放っているんでしょうか?>br<>br<「自分じゃ全然わからないんですけど……。それと陛下の言動と何か関係があるってことですか?」>br<>br<「はい。乙女の芳香は異性や魔物を引きつけるという特性があるのです。ですから光魔法の優れた使い手であるエドナを側に付けたのですが……。どうやら人間の男性対策も考慮しなければならぬようです」>br<>br<神殿騎士を護衛に付けましょうか、とラルフさんは爽やかに笑う。>br<ヤバイ。何だか頭痛がしてきた。マタビみたいなものなのか、とこめかみを押さえる。>br<>br<「ラルフさんは何ともないんですか?」>br<>br<この人も異性には違いない。年の功で影響を受けないのか、それとも男性として機能しない(ゴメナサイ)からなのか、今までラルフさんからそういった類の目で見られたことはないと思う。>br<でもよく見れば、顔立ちなんかはアレンさんと同様整っているし、中年太りというわけじゃない。むしろ年齢の割には、引き締まった体つきをしていると思う。会話やエスコートもスマートで、かなり女性慣れしているように見えるのだ。>br<>br<「ええ。わたしには耐性がありますから」>br<>br<耐性と聞いて、わたしは軽く首を傾げる。

ワクチンみたいなものでもあるんだろうか。>br<>br<「ラルフ様は先代の“神の器”で、先代の“聖なる乙女”であられたレリア様とは親しくされておいででしたから」>br<>br<「いぶかるわたしを見て、エドナが補足してくれた。」>br< あれ？

じゃあ、アレンさんのお母さんは誰なんだろう？>br< “聖なる乙女”は正妃となるはずだから、ラルフさんには別に奥さんがいたのかな？>br< 余計に混乱してきたわたしを見かねてか、ラルフさんは衝撃的なことを口にした。>br<>br<「アレンはわたしとレリアの間に授かった息子で、陛下はレリアと先代国王の間に生まれた御子です。つまり……」>br<>br< ——つまり、アレンさんと暴力陛下は異父兄弟！？>br< “聖なる乙女”って、多夫一妻制ですかっ！？>br< 全然“聖なる”じゃないよー。>br< ヒクヒクと口元を引きつらせ、わたしの意識はそこで途切れた。

その想いは……（前書き）

少し休憩、番外編です。
アレン視点のお話。

その想いは……

先日、“神の器”としての役目をようやく果たしたが、気分は最悪だ。“聖なる乙女”がこの世界に存在しないとわかってから召喚の儀式当日まで、心は重苦しい鉛色の空のようで、日の光が差すことはなかった。>br< ずっと迷っていた。迷った心のまま、召喚の儀式に臨んだ。>br< 他の世界から“聖なる乙女”を招くことが正しいのか否か。>br< 今ならそう思う、きつと正しくないのだ、と。>br< 予備知識も何もないまま“聖なる乙女”だと言われ、祭り上げられても困惑するだけだろう。>br< ましてや“至上の甘露”とまで謳われる乙女の体は、他者——異性——にしか認識できない特徴で、乙女自身に自覚などまるでない。>br< ただでさえ混乱して、不安や恐怖を覚えているだろう乙女に、自分は決してしてはいけないことをしてしまったのだ。>br< その時のことを思い返し、溜息をつく。書類に目を落としているが、内容なんてさっぱり頭に入ってこない。>br< 頭の芯が痺れるような甘い香り。腕の中で硬直する柔らかな肢体。くちづけは甘美で……けれど全てを拒絶する険しい眼差し。>br< 凜とした漆黒の目に射抜かれて、己のしたことに激しく後悔した。“聖なる乙女”といえど、彼女は異世界の住人だ。>br< 突然知らない場所に連れ去られ、見知らぬ男に唇を奪われて、恐ろしいと感じない方がどうかしている。だから彼女が見せた反応は至極当然のことなのだと、頭では理解している。だから彼女の心の準備ができるまで、距離を置く方がいいに決まっている。>br< サンセファール神殿の神官長である父の判断は正しい。焦ることはない。自分は“神の器”で、“聖なる乙女”の傍らに在ることを許される、幸運な男のひとりなのだ。>br< それなのに、たとえ父親であろうとも、他の男が彼女の傍にいないかと思うと、どうしようもなく心が騒ぐ。ドクドクと心臓が脈打ち、息が上がる。誰の目にも触れ

させたくない。>br<>br<『——彼女は、我が乙女』>br<
<>br< 不意に脳裏に響いた声に、身震いする。手にしていた書類を机の上に置き、知らずに止めていた息を吐く。>br< この焦燥感は一切誰のものなのだろう？>br< 自分のものなのかこの身に宿るサンセファール神のものなのか、どちらのものかわからない。>br< ただひとつはつきりしているのは、彼女を手放す気はさらさらないということだけ。>br< 泣き叫び、拒絶されようとも、いつか彼女を組敷き、甘美なる蜜を思ふ存分味わうのだ。>br<>br<「……リリコ。わたしの乙女」>br<
>br< できれば、彼女が望んでその身を差し出してくれるよう、今は願おう。>br< 黒髪の乙女のたおやかな肢体を思い浮かべ、わたしはうつとりと目を閉じる。さっきまで後悔の念にかられていたというのに、我ながら現金なものだと思う。>br< どちらの想いも真実で、どちらが正しいとも言い切れない。>br< 相反する想いに身を焦がすのも、心地いいとさえ感じてしまう。再び見えるその時に、彼女はどんな顔をするのだろうか。>br< 花開くような微笑みを見せて欲しい。>br< そう願うのは罪だろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152w/>

サンセファールの聖なる乙女

2011年10月16日21時56分発行